

井上ゆかり 著

## 『生き続ける水俣病』

——漁村の社会学・  
医学的実証研究』



評者：宮内 泰介

### 1 水俣学としての本書

水俣市に隣接する芦北町の<sup>めしま</sup>女島（沖行政区）。それがこの本の舞台である。1959年、女島の網元の一人、緒方福松さんが水俣病を発症した。『チツソは私であった』などで知られる緒方正人さんのお父さんである。

この女島の水俣病患者たちについて、故・原田正純さんが唱えた「水俣学」を継承しながら描こうとしたのがこの本である。著者の井上ゆかりさんは、元看護師で、熊本学園大学で博士号を取得し（本書のもとになったのがその博士論文）、現在同大学水俣学研究センターで研究員をしている。

水俣学とは何か。原田さんはこう書いている。「狭い医学に閉じ込めてしまった教訓や「素人」の指摘がしばしば正しかったことから考えれば、バリアフリーの学問、専門の枠組みを超える学問、そして「素人」「専門家」の枠組みをも超えた市民参加の開かれた学問でありたい。（中略）水俣病事件を鏡に広範な学問の模索を「水俣学」と呼んでみたい」（原田2007：280）。

この姿勢に深く共感する評者は、多くを学びたいと思ってこの本を手を取った。

本書は、主に二つの研究から成る。一つは、女島の生活史、とくに漁業の歴史の民族誌的な解説である。もう一つは、住民たちの医学的実態調査である。この二つを一つのものとして合わせて行なったところにこの本の価値があり、また困難があった。水俣病において、社会的な側面と医学的な側面はもちろん分かちがたく結びついているのだから、水俣学がその両方をとらえようとするのは当然のことだ。もちろんそれは簡単ではない。本書はそれに挑戦する。

### 2 本書の構成と内容

そのような意図で書かれた本書の内容を、やや詳しく見てみよう。

第一章「[全村的協働組織]としての女島——統体制を中心に」は、女島の漁業の歴史が描かれる。

女島の中でも漁業に特化した地域である沖行政区は、確認できるだけでも明治期以来、イワシの地曳網を中心に村ができていた。11の網元がいて、それぞれがイワシの地曳網を経営していた。漁場<sup>あじろ</sup>（網代）の管理は漁業組合が行ない、抽選で各網元が毎日交替して漁を行っていた。

そして戦後、女島はイワシの巾着網（まき網）の村になる。1949年に始まった巾着網は、（地曳網の網元が再編された）5人の網元の下で操業された。それぞれが、地区外の間人も含めた30～40人の乗り手（網子）を雇っての操業だった。しかし、天草の巾着網との競争に負けたこともあり、昭和30年代に女島のイワシ巾着網は衰退へ向かう。その後、女島の漁業は個人漁へ転換していく。

第二章「全村的協働組織としての統体制の成立と展開」は、巾着網最盛期の女島の地域社会のしくみを「統体制」と呼び、その実態をさぐる章である。

「統」とは、イワシ巾着網において網元の下で形成されている漁撈集団のことである。人びとの生活がこの「統」を軸に成り立っていることから、著者はこれを「統体制」と呼んだ。

この「統」は、親族関係を中心としつつ、それ以外の者も入っている。しかし、親族関係であるかどうかにかかわらず、網子たち、つまりは漁撈集団のメンバーたちは、「兄弟」という同族意識をもっていた。(著者は詳しく論じていないが、この「同族」のしくみは、農村社会学でいう「同族」、つまりは擬制的なオヤコ、キョウダイ関係をもとにした地域内の生活共同集団、と同じである。)

続く第三章からが、被害の話である。

第三章で強調されるのは、1959年に水俣市鮮魚小売商組合が不知火海の魚の「不買宣言」を出して以降、女島の魚が売れなくなるという被害を受けたということ、そして、1972年に以降の話であるが、旧湯浦町漁協が未認定患者申請を支援する運動を進めたことである。著者はこの後者の点について、巾着網の統体制は崩れたものの、そこで確立していた「全村的協働体制」が生きた、と議論している。

そして第四章が、医学的調査の結果の分析になる。

医学調査は、2011～2012年に46名の住民を対象に行なわれ、診断(原田正純・下地明友が担当)に加えて補償状況などの聞き取りも行なわれた。

ここで著者は、単に医学調査の結果を報告するだけでなく、「ジェノグラム」という手法を使って、女島の水俣病患者の実態に迫ろうとする。ジェノグラムとは、(本書の記述をそのまま使えば)医学・保健学において、個人の健康・疾患とその親族関係・社会関係との相関を全体的に把握し可視化する手法、である。もう少しわかりやすくいうと、家系図を書いて、そ

こに個人の疾患を記入していき、家系図全体の中で諸個人の疾患を検討する、という方法だ。個人個人を切り離して水俣病被害を語るのではなく、統体制や家族関係を中心に、面として水俣病被害を明らかにしようという方法である。水俣学研究センターの下地明友氏(臨床精神医学)がこのジェノグラムを水俣病の実態解明に適用することを提唱し(下地2010)、著者がそれを女島で応用してみたものだ。

ここで行なわれているジェノグラム利用は2点。1点目は、疾患そのものでなく、水俣病の補償状況を家系図の中に書き込んだの検討である。実際に、ある統でそうした図を描いて細かく検討した結果わかったことは、同じ家族であっても認定と棄却に分かれたり、あるいは、家族の他のメンバーの申請具合を見て認定申請を躊躇したり、といったことが数多く存在している、ということだった。家族関係や統体制の中の社会関係が個人相互にさまざまな影響を及ぼしながら、結果として、補償面でも大きな分断を生んでいることがわかったのである。

もう1点のジェノグラム利用は、2011～2012年の医学調査に加えて過去の医学調査も利用しながら、主に世帯内での診断結果とその推移を細かく見てみるという作業である。やはり個人の健康状態だけでなく、それを家族関係の中で面的に見る、さらには時間経過の中で歴史的に見る、という検討である。この結果わかったこととして、水俣病が、同じ家族内でも、同じ症状として出るわけではなく、「多型的・不均質な症状」を呈するのであり、しかしそのことのゆえに、限られた認定基準の中で、家族内で補償状況・申請状況が実にバラバラになってしまっている、ということだ。

第四章の後半では、2011～2012年の医学調査をもとに、さらに詳しい検討が加えられる。まず第1に、この医学調査の結果と、実際に各

人が受けている補償との間に大きな乖離があることが指摘される。46名のうち、37名が水俣病（うち1名が胎児性水俣病）、9名が「水俣病疑い」だった。水俣病の可能性が否定された者は一人もいなかった。一方、水俣病と診断された37名のうち、水俣病の認定を受けている者は21名に過ぎず、あとは（1995年政治解決にもとづく）「医療手帳」保持者、（水俣病特措法にもとづく）「被害者手帳」保持者だったりする。行政が、患者を探し出す姿勢でなく、本人申請主義で行なっているために、このような結果になっているのである。

さらに、この46名のうち11名については、1976年に原田正純らが行なった医学的調査も受けているため、34年間の変化を見ることができる。その経年変化について検討した結果、当然であるが、患者たちの症状はさまざまに変化しており、消失した症状がある一方で、悪化した症状、あるいは新たに出現した症状などがある。そうした症状の変化は、数としてもたいへん多い。しかし、住民たちのほとんどは、そうした症状の変化に応じたランク付け変更の申請をしていない。時間的な経過においても、実態としての水俣病と補償との間の乖離が進んでいるのである。

第五章「暴露と権力的水俣病が示唆する認定基準のゆがみ」では、少し違うデータから、女島の住民たちの状況を掘り起こす作業がなされる。使われるのは、原田正純が1960年ごろから収集してきた臍の緒の水銀値と、熊本県衛生研究所が1960年に測っていた毛髪の水銀値である。著者は、これらのデータが残っていた34名の個人を特定し、その人たちの補償の状況を確認した上で、それと当時の水銀値とを照らし合わせ、検討を加えている。その結果わかったことは、水銀値がたいへん高いにもかかわらず認定されていないなど、水銀値データと

補償状況の大きな乖離だった。

終章「濃縮される漁村の水俣病被害」は、これまでの議論を総括し、さまざまな社会的側面がどう連鎖して被害が深まっていったのかを議論している。さらに、最後には、それを踏まえて水俣病政策への11の提言がなされる。

### 3 漁業史の意義と「ジェノグラム」という方法論

このような内容の本書について、二つの点について議論してみよう。一つ目は漁業史的な記述の意義について、二つ目は「ジェノグラム」という方法論についてである。

評者が、水俣病発生エリアでの漁業史研究に最初に接したのは、色川大吉編『水俣の啓示（上）』（1983年）に収録された最首悟「不知火海漁業の移り変わり——芦北郡女島の巾着網漁」だった。この最首の論文は、本書と同じ女島を対象に、一人の網元について注目して、その盛衰を描いたものだ。共同調査者だった色川大吉と芳賀しげ子によって、同じ網元についての聞き書き（色川・芳賀1981）も書かれている。

最首は当時、水俣病の全体像に迫るために漁業に、そして漁業・漁村の被害に、注目したと書いている。その視点に当時私は目を見開かされたものだが、井上の本書もある意味それを引き継ぎ、発展させたものとも言えるだろう。

著者は一つの地域を詳細に調べることを選択した。一つの地域に注目して一人ひとりの住民に焦点を当てようというとき、住民たちが拠って立つコミュニティに注目する必要がある。そして女島の場合、そのコミュニティを存立させているものが漁業にある、と著者は見た。漁業を見ることで、住民たちの実態、そして水俣病の実態に迫ることができる、と考えた著者の方法論は、支持できるものだし、本書は一定程度

それに成功していると見ることができる。

一方、評者に若干不満があるとすれば、結局のところ短い期間に終わったイワシ巾着網の漁撈組織を女島の生活システムの理念型としている点だ。著者はこれを「統体制」と呼んでいる。しかし、著者の見積りでも、女島のイワシ巾着網は、1949年に始まり、1952年がピークで、1957年に終了した。わずか10年足らずである。

想像するに、女島での村の共同性は、長く、さまざまな面で複層的に存在してきて、それをもとにして戦前の地曳網の漁撈組織も、また戦後の一時期のイワシ巾着網の漁撈組織も存在している。したがって、「統体制」があって生活の共同のしくみがあるのではなく、生活の共同のしくみがあって、それが時代によって「統体制」として現れた。このあたり、著者もおそらく十分に理解しているのだと思うが、それを「統体制」として議論したところで少し説明力を欠いてしまっているように評者には思える。

また、女島のイワシ漁の歴史は、日本列島全体のイワシ漁の歴史の中に組み込まれている。江戸期以来の肥料（干鰯）需要に加えて明治以降煮干し需要などが増大し、それに従い、長崎から熊本にかけての島嶼部や沿岸部において、イワシ漁・イワシ加工業が大きな経済的なプレゼンスを示すようになった。その中で最有力の漁法になっていったのが巾着網で、その技術も次第に進歩し、戦前から戦後にかけて、各地で巾着網の大きな漁撈集団が登場している。しかし産地間の競争やイワシ資源の変動によって、産地の入れ替わりは激しく、1950年前後に最盛期を迎えた多くの産地が衰退していった（たとえば、五島列島のイワシ漁の盛衰を描いた吉木武一1983を参照）。女島の五つの巾着網集団の盛衰も、そうした大きな日本の社会経済の流れ、イワシ漁の全国的な流れの中にあると見る

ことができる。そのあたりの流れを含めて本書の記述を眺めると、もっと事態を立体的に見ることができるだろう。

議論したい二つ目の点は、「ジェノグラム」という方法論である。先に述べたように、ジェノグラムとは、個人の健康・疾患とその親族関係・社会関係との相関を全体的に把握し可視化する手法である。この手法は、前述の通り下地明友（2010）によって水俣病研究への適用が提唱され、それを実際に試みたのが本書だ。下地の論文は難解でやや理解が難しいが、評者が理解できたかぎりでは、この手法の提案の要は、多様な症状のある水俣病について、その認定問題をクリアするために、症状を輪郭のはっきりしたものを見ないで、各人の症状を家系図の中に書き込み、その全体の中で議論する、しかもその議論は当事者参画のもとに行なう、というものである。

したがってこの手法は、水俣病を個人の疾患に還元するのではなく、面的に見る、そしてそのことによって実態に迫り、政策批判・政策提言をする、という点において、十分に可能性があるし、本書もその可能性を示している。しかし一方で、下地が意図したところが本書で全面的に展開されているようでもなく、また、結局のところ従来の水俣病研究、認定制度批判の枠組みを大きく変えたわけでもないように評者には思える。このあたりは、評者の能力を超えるので、今後のより広い議論を待ちたい。

#### 4 おわりに

本書は、ある一つの地域にしぼり、水俣病をめぐって従来別々に行なわれていた医学的調査研究と社会科学的な調査研究とを統合させようとした貴重な試みである。

著者は原田正純の「水俣学はあくまで責任の追及を続けていく告発の学問」だという言葉

とくに引用しているが、両方の側面を見ることによって初めて水俣病の本当の姿が見えてくるのであり、両方を合わせることによってより深く被害の実態、被害者放置の実態が浮き彫りにできるのだ、という著者のスタンスは支持できるものだ。

その試みがこのように書籍という形で提示されたのだから、私たちはこれを、その成果も不十分さも含めて、一つの参照軸とすることができる。それによって、他地域や他の問題における調査研究に、また問題解決に、生かすことができるだろう。原田正純さんが「水俣学」に込めた思いもそういうことだった、と評者は理解したい。

(井上ゆかり著『生き続ける水俣病——漁村の

社会学・医学的実証研究』藤原書店、2020年3月、346頁、定価3,960円(税込))

(みやうち・たいすけ 北海道大学大学院文学研究院教授)

#### 【引用文献】

色川大吉・芳賀しげ子(1981)「日本民衆史聞き書(3) 女島にて——井川太二聞き書」『東京経済大学人文自然科学論集』57:88-116(色川大吉2020『不知火海民衆史 下・聞き書き篇』揺籃社に再録)

最首悟(1983)「不知火海漁業の移り変わり——芦北郡女島の中着網漁」色川大吉編『水俣の啓示——不知火海総合調査報告(上)』筑摩書房, pp.241-321

下地明友(2010)「『水俣病』研究の方法論再考——医学的思考の新たなパラダイム転換」『水俣学研究』2:23-30

原田正純(2007)『水俣への回帰』日本評論社

吉木武一(1983)『奈良尾漁業発達史』九州大学出版会